（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	岩倉　洸
論文題目	ポスト・ソビエト時代の国家介入的政教関係 －現代アゼルバイジャンにおけるイスラーム管理の諸相－		

（論文内容の要旨）

本論文は、アゼルバイジャン共和国（以下アゼルバイジャン）における政教関係を、その主たる宗教であるイスラーム（国民の約6割がシーア派、約3割がスンナ派）に対する国家的管理に着目して考察するものである。アゼルバイジャンは1991年のソ連解体と独立までソ連邦を構成する民族共和国の一つであり、ソ連末期のペレストロイカによって信教の自由が宣言されるまで、イスラームは科学的無神論を是とするイデオロギーのもとで厳格に統制されていた。そのイデオロギーが消失した後、権威主義体制下でイスラームはやはり強力な国家的管理のもとに置かれ、現在に至る。

本論文は、アゼルバイジャン地域研究への貢献としてイスラーム管理の実態を多角的に解明し、アゼルバイジャンの政教関係研究の新機軸を提示すること、さらに近年より広くアジアを対象として活性化している国家介入型の政教関係をめぐる学術的議論に旧ソ連のイスラーム地域としてのアゼルバイジャンの事例をもって新知見をもたらすことを目的とし、3つの具体的な問い、(1)アゼルバイジャンの国家的イスラーム管理は政教関係研究の系譜ではどのように位置づけられるか、(2)国家的イスラーム管理の背景、それを支える理念・制度・組織はどのようなものか、(3)世俗国家アゼルバイジャンにおいてイスラームはどのような役割を課されているのか、を設定した。

序章では、本論文の目的、意義、問い、研究手法などを提示し、先行研究のレビューを行った。

第1章「地域としてのアゼルバイジャン」では、アゼルバイジャンの歴史・政治・経済・宗教的側面を概観し、トルコ、イラン、ロシア3方面との歴史的相互関係が現代の政治体制や宗教をめぐる状況に系譜として現れていることを主張した。

第2章「現代における政教関係の視点と系譜」では、政教関係に関連する理論的枠組みの整理と考察を行い、旧ソ連圏研究で用いられてきた「公共宗教論」や「公式／非公式（並行）イスラーム論」に加え、国家による宗教管理モデルとして「公定宗教論」の有効性を指摘し、政教関係を複数の位相でとらえる必要性を主張した。

第3章「ポスト・ソビエト時代におけるアゼルバイジャンのイスラーム」では、国家から見たイスラームの位置づけを歴史的に検証し、独立後のイスラーム主義への警戒に由来する、社会秩序の維持と関連づけたイスラーム管理の実現について論じた。

第4章「アゼルバイジャンにおける宗教管理制度と組織」では、国家的イスラーム管理を担う制度と組織の枠組みを提示し、ハード面を担う政府組織とソフト面を担うカフカース・ムスリム宗務局という二元的管理が機能してきたことを明らかにした。

第5章「国家による宗教管理の正当化とアゼルバジャン・モデルのイスラーム管理」では、「古来、宗教・宗派共存が維持されてきた『寛容の土地』アゼルバイジャン」という理念が国家的宗教管理を正当化しており、そのもとで少数派であるスンナ派に対する優遇政策が顕著であることを示した。

第6章「二元的なイスラーム管理から一元的なイスラーム管理へ」では、国内外の情勢変化とそれに対するムスリム宗務局の無策のゆえに、2010年代以降、二元的管理体制から政府組織への一元化という変容が起きていることを明らかにした。

第7章「『正しいイスラーム』と宗教教育・宗教的啓蒙」では、国家の推奨する「正しいイスラーム」につき宗教教育・啓蒙の側面から検討した。寛容を重視する「多文化主義」を導入しつつ、イスラームが個人のアイデンティティ形成と社会秩序維持に資する国民的な道徳的価値の源泉の一つと位置づけられていることを示した。

第8章「アゼルバイジャンにおける国家とイスラーム」では、検討してきた実態にそくして政教関係を論じる新機軸として、公式イスラームに「公許」「公認」「公定」の3つの位相を設定することを提起した。それに従えば、現状はソビエト型「公認イスラーム」からトルコ型「公定イスラーム」への移行過程にあることを主張した。

以上の議論を経て、現代アゼルバイジャンでは、(1)イランや西洋に批判的視線を向けつつ多文化主義を標榜し、ソビエト的政教関係からトルコ的政教関係へと移行している、(2)宗教・宗派が共存する「寛容の土地」という理念が国家的イスラーム管理を正当化しており、政府組織とカフカース・ムスリム宗務局による二元的管理が実現されてきたが、2010年代以降それは政府組織である宗教団体担当国家委員会に一元化されつつある、(3)「正しいイスラーム」の設定によりアイデンティティ形成と社会秩序の維持に資する国民的な道徳的価値の源泉と位置づけられている、と結論した。